

| | | |
|---------|----------------------|-------------------|
| 氏名(国籍) | ばん 房 | きよつくちよる 極哲(韓国) |
| 学位の種類 | 博士(言語学) | |
| 学位記番号 | 博甲第2748号 | |
| 学位授与年月日 | 平成14年3月25日 | |
| 学位授与の要件 | 学位規則第4条第1項該当 | |
| 審査研究科 | 文芸・言語研究科 | |
| 学位論文題目 | 明治期における待遇表現の社会言語学的研究 | |
| 主査 | 筑波大学教授 | 博士(言語学) 坪井美樹 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 博士(文学) 湯澤質幸 |
| 副査 | 筑波大学教授 | 高田誠 |
| 副査 | 筑波大学助教授 | 沼田善子 |
| 副査 | 筑波大学助教授 | 大倉浩 |

論文の内容の要旨

本論文は、社会言語学的な観点から明治期の待遇表現について考察したものである。具体的には、一人称・二人称の人称代名詞と文末表現形式を中心に取り上げ、これらが明治期の社会階層と性差によって、どのように使分けられているのか、各言語形式はどのような相関関係を持つのかを実証的に記述することを目的としている。

本論文の構成は以下のとおり全9章より成る。

- 第1章 序論
- 第2章 先行研究と研究の方法
- 第3章 明治期日本語の時期区分と待遇表現
- 第4章 『社会百面相』における待遇表現
- 第5章 明治期の一人称代名詞「ワタクシ」「ワタシ」
- 第6章 明治期の二人称代名詞「アナタ」「オマヘサン」「オマヘ」
- 第7章 社会階層からみた『社会百面相』における文末表現形式の再考察
- 第8章 明治期に置ける終助詞
- 第9章 結論

第1章の序論では、明治期の待遇表現について考察する本論文の目的と基本的な観点が述べられる。更に、中心的な資料として用いる『社会百面相』という世相風刺小説の概要が紹介され、その待遇表現資料としての有用性が指摘されている。

第2章では、従来の明治期待遇表現の研究が、多く江戸期待遇表現体系の研究の延長上で論じられていて、明治期特有の社会階層の出現を考慮に入れた、動的できめ細かな研究に欠けていたことを指摘している。そのうえで、著者は、このような問題点を乗り越える方策として社会言語学的研究の有効性と必要性を提起している。

第3章では、従来の研究が採用する待遇表現の変遷に関する明治期内部の時期区分を取り上げている。諸研究が何をもって時期区分の理由としているかを比較検討し、明治期以降現代に至る待遇表現の性格が確立するのは明治30年代であるとする。そして、そのような明治期待遇表現の成立にとって重要な要因として、一つは「言文一致運動」の展開と、もう一つは新しい社会階層の誕生とを挙げている。

第4章では、『社会百面相』に現れる人称代名詞と文末表現形式が、使用者の性差及び社会階層との関連のもとに記述される。これは、本論文の次章以下で展開される通時的考察の基盤となる記述である。ここで明らかにされたことは概略次のようである。

一人称代名詞については、使用者の性差による違いが観察される。男性にはワタシのしようがほとんど見られず、その代わりに使用者の社会階層に応じてワタクシ・ワガハイ・ボク・ワシ・オレなど多様な代名詞が使用される。このうち、ワガハイ・ボク・ワシは特定の社会階層に属する男性によって使用される傾向が強く、ワタクシ・オレは社会階層よりも相手や場面に応じて使用されている。これに対して、女性の場合は、ワタクシ・ワタシ・アタシの三つにほぼ限定され、社会階層との相関性が男性より稀薄である。

二人称代名詞は、男女ともアナタの使用が多く、当時最も一般的な二人称代名詞であったことがうかがえる。特殊な傾向としては、社会的上層に属する女性に自分の夫に対するアナタの多用が見られ、また、男性は目上の相手にアナタを使いにくいという傾向が見られる。

文末表現形式については、男性専用のものにチャ・ DEAL・デゴザル・デグス・デガス・デゴワスがあり、それに対して現代でもよく使われるダ・デス・デアリマス・デゴザイマスは、性差・社会階層による偏りを持たず使用されている。

第5章では、前章の記述を出発点として、明治期全体を通じての一人称代名詞ワタクシ・ワタシの使用を論じている。特に、本章では、「相手のありかた」と「場面」という尺度を導入して両語の待遇価値を究明し、ワタクシが「依頼・要求」「謝罪」「相談」などの改まった場面で「丁寧性」や「品位性」を保ちつつ使用されるのに対し、ワタシは「伝達」「相談」などのあまり改まりが要求されない場面で使用されていることを明らかにしている。

第6章では、やはり第4章の記述を踏まえながら、二人称代名詞アナタ・オマヘサン・オマヘについて明治期全体を通じての使い分けの変化を論じている。アナタは最も一般的に使用される二人称代名詞ではあるが、男性の場合前期から後期にかけて特に使用に変化が見られないのに対し、女性の場合は後期になると前期よりも使用が増加し、待遇価値も男性の場合よりも高く保たれている。一方、オマヘは後期になると待遇価値が低下するとともに、男性の使用が増加し女性の使用は大きく減少するといった事象が指摘される。

第7章では、第4章で一通り記述された文末表現形式と社会階層との相関を再度取り上げる。前後の時期との違いや使用社会階層の分析をさらに精密化し、第4章で得られた文末表現形式使用の状況は、現代にまで至る文末表現形式の分布が明治30年代前半に確立したことを示すものであると結論づける。

第8章は、待遇表現に関わる文末表現形式の考察から必然的に派生する問題として、明治期の終助詞の用法を論じている。ここでは明治20年代から40年代の時期に注目し、この期間おにも性差による終助詞の用法の変化が見られ、女性では「お+動詞連用形+ヨ・ナ」「敬体の命令表現+ヨ・ナ」のような形式において使用の減少傾向が見られることなどを指摘している。

最後に、第9章では、本論文で明らかになったことをまとめ、今後の展望を述べている。即ち、明治期の待遇表現体系の成立とその変遷においては、江戸から明治という近代社会への大きな転換にあたって台頭した、新しい社会階層に属する人々の言語状況が、重要なファクターとなっている。そして、それら新社会階層の言語状況を見るうえで、『社会百面相』のような資料がきわめて有力な情報を提供するものであることが本論文によって実証され、明治30年代が、現代の待遇表現のありかたの基盤が形づくられた時期であることが明らかになったとする。これらの成果を踏まえて、さらに社会言語学的観点から待遇表現の歴史を探っていくことの有効性と必要性とを筆者は強調して論を締め括っている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

日本語における待遇表現の歴史は、古くから多くの言語研究者注目され、研究が積み重ねられてきた。しかし、

本論文の筆者が指摘するように、多くは、いわゆる敬語の諸形式の持つ待遇価値の序列を、使用者の敬意の程度や、相手との身分差によって固定的に捉えて記述する研究であった。そのような研究は、江戸時代のような固定的な身分制度の社会の中での待遇表現の記述には有効であったが、明治時代のような社会的変動の激しかった時代における待遇表現の変化の動態把握には必ずしも成功してこなかった。本論文は、このような中で明治期に台頭した新しい社会階層の言語に注目し、明治期内での待遇表現の変化を動的に捉えようとする有意義な研究である。

本論文の著者の問題意識は明確であり、分析の方法も現在までの待遇表現研究の成果及び社会言語学の成果を着実に踏まえた明晰なものである。具体的な用例の処理においても、日本語待遇表現に対する著者の言語感覚が適切なものであることを示している。

本論文の成果の第一は、『社会百面相』という、従来の日本語史研究があまり注目してこなかった文献資料を自ら発掘して、明治期の日本語資料としての有用性を実証してみせたことである。本資料は、明治20～30年代の世相風刺小説であり、明治になって新しく生まれた社会階層の人々の言葉遣いを活写したものである。本資料に着目したことによって、本論文は明治期の待遇表現の動態把握に大いに寄与したと評価できる。

本論文の成果の第二は、明治期の待遇表現を社会階層・性差との相関のもとに捉え、日本語待遇表現の歴史的考察において、社会言語学的方法の有効性を実証してみせたことである。近年、社会言語学は、人間社会における言語の役割を捉える上で幾多の貢献をなしてきた。しかし、もともとの問題意識と方法が現代の言語コミュニケーションの解明にあったために、社会言語学的観点を歴史的研究に適応した例は少なかった。本論文は、この点において先駆的な研究であり、意欲的な試みとして評価されるものである。本論文は、これからの待遇表現に対する社会言語学的研究の極めて有益な先例となるものと思われる。

本論文の成果の第三は、具体的な研究成果として、現代日本語で使われるワタシ・ボク・オレ・アナタ・オマエ等の人称代名詞、また、デス・デゴザイマスなどの文末表現形式が、明治期においてどのような形で一般化していったかを、従来の研究よりも精密に記述できたことである。

本論文は上述のごとく有益なものであるが、なお追うべき点があることも審査の過程で指摘された。本論文が主資料とした『社会百面相』が優れた資料であることは揺るがないにしろ、その作品としての性質から、江戸時代から引き続き存続していた社会階層、特に下層の社会階層の人々の言語使用の状況が必ずしも明らかにできないという、資料としての限界を持つ。この点を何らかの別な調査方法に依って補う必要があることが指摘された。また、歴史的研究においては、文献資料に頼らざるを得ないため、話し言葉を主たる対象として発展してきた社会言語学上の知見を適用できない面もあることが指摘され、研究方法の更なる深化が今後の課題であるとされた。しかし、以上のような問題点が今後に残されるとしても、本論文の成果は、充分評価に値するものであり、著者が本論文で示した力量は今後の更なる研究の発展を充分期待させるものである。

よって、著者は博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。